

特集 グローバル化とアジア社会の変容——東南アジア地域研究の視点から

熱帯のメトロポリス クアラルンプル断章

——スクォッター都市から世界都市へ？——

**An Imaginary Geography of Kuala Lumpur as a Tropical Metropolis :
From Squatter City to Global City ?**

藤巻正己*

FUJIMAKI Masami

キーワード：スクォッター，外国人労働者，アラブ人観光客，世界都市，二重都市

KEY WORDS: squatters, foreign workers, Arabian tourists, global city, dual city

Since the mid-1980's, Kuala Lumpur (hereinafter referred to as KL) has become a 'theatre of accumulation' of world capital accompanying a drastic transfiguration of its landscape from a tin town to a tower city. Aiming at altering KL from a sordid and filthy developing city to a 'beautiful tropical metropolis', the Malaysian Government has been promoting 'beautification and cleanliness' policies.

These involve on one hand, the eviction of squatters and elimination of settlements and hawker stalls, regarded as Third World 'eyesores', and on the other hand, the renovation of decrepit buildings and the creation of 'esthetique' space. As a result, the number of rich Arab tourists, and tourists from European and East Asian countries, including Japan, Korea and China, are rapidly increasing. In addition to foreign tourists, the inflow of foreign workers, mainly from Indonesia, has also drastically changed the 'ethnoscape' of KL.

Despite the fact that the Malaysian economy depends on these foreign workers, they have been regarded as the source of increasing social deviance in Malaysian society and associated with crimes involving drugs, theft and violence. Moreover, the increasing numbers of foreign squatters has emerged as another serious social problem at a time when the number of Malaysian squatters has been gradually declining in recent years. In contrast with the emerging Malaysian middle-class that enjoys a condominium lifestyle, the increase of foreign squatters have led to an expansion of the numbers of urban poor or under-class in KL. Such social polarization and the change of the "ethnoscape" suggest that KL is taking on the traits of a 'dual' or 'global' city.

* 立命館大学文学部教授 Professor, Ritsumeikan University

I. 熱帯のメトロポリス クアラルンプル

マレーシアの首都クアラルンプル。マレー半島西岸内陸部、北緯3度・東経101度に位置する人口130万(2001年)の熱帯のメトロポリスである。メガシティ(mega city)と化しつつあるジャカルタやバンコックに比べると、東南アジアではずいぶん小ぶりの首都である。とはいえ、19世紀末以来、旧英領マラヤ時代の植民地首都として、そして1957年にマラヤ連邦として独立を果たして以来、KL(Kuala Lumpurを略称して地元民はKLと呼ぶ)は半島マレーシアあるいは1963年以降マレーシア連邦の首座都市(primate city)として成長をとげてきた。

私がこの街を最初に訪れたのは1985年8月31日の独立記念日の頃であった。この旅をきっかけに私は、河川や鉄道沿い、郊外の錫採掘地跡などの公有地や開発予定の私有地に無断居住し、その結果として基本的人間欲求を欠如した環境劣悪な居住環境の中で暮らす「スクォッター(squatter)」など都市貧民をめぐる問題に関心を深めることになった。

それ以来KLを訪れるたびに、この街のトポグラフィの変貌ぶりには驚嘆するものがあった。なかったものが出現し、あったものが姿を消している。だからこそ私の心象風景はいつも描きなおされ、KLというテキストの再読、再解釈を余儀なくされた。それだけこの街の建造環境、そしてそれを包み込むマレーシアという政治経済・社会文化空間が大きく変質をとげてきたということである。

昨年(2002年)の夏にも私は、インドネシア人など外国系スクォッター社会の現状をうかがい知るため1カ月間KLに滞在したが、その時のフィールドノートには次のようなメモが見出し風に書き留められている。

ムナラ都市化する世界資本「蓄積の劇場」KL

熱帯の美しいメトロポリスの創造 エステ空間の演出

スクォッター都市から世界都市へ?

世界都市化の表象としての外国人労働者とアラブ人ツーリストの急増

二重都市化するKL?

これらのキーフレーズは、私がここ数年通っているカンボン・チェンダナというマレー系スクォッター集落の茶店で夕暮れ時ベトロナス・ツイン・タワーやKLタワーを見上げながら住民と世間話をしている時、あるいは道行くアラブ人ツーリストの団団を目抜き通りのブキット・ビンタンのカフェテラスから見やりながら、さらにはKL詣での際に必ず立ち寄るNew Strait Times社資料室でデジタル化された新聞記事の検索作業中などに、思い浮かんだものである。

この小稿は、以上にあげた断片的なフレーズを素材として、21世紀初頭のKLという熱帯のメトロポリスに対する私の心象地理(の一部)を描いたものである。

II. 「ムナラ都市化」する世界資本「蓄積の劇場」クアラルンプル

「ムナラ都市化=menaranization」とは、タワーを意味するマレーシア語の menara と英語の～nization とを接合した（つもの）私の造語である。言語学的に適切かどうかはあやしいが、KLの変貌ぶり、建造物の超高層化ぶりをよく表している言葉ではないかと思っている。

1980年代半ばのKLは、まだ緑濃き熱帯の旧植民地都市としてのたたずまいを残していたものである。当時の鳥瞰写真を見ると、確かに57年の独立以降、KLがマレー・ナショナリズムの空間的磁場へと転化したことを象徴する壮大な国立モスクやイスラーム風の意匠をほどこしたオフィスビルのグアブミがランドマーク（陸標）としての役割を果たしていることがわかる。また「ゴールデン・トライアングル」と呼ばれるKL最大の繁華街に高層ビルが立ち並び始めていることが見て取れる。しかし、19世紀半ば錫の積み出し集落として生まれたKLの歴史的コアとも言うべきクラン川とゴンバック川が合流する付近を中心に、左岸のチャイナタウン、右岸の旧植民地政庁やマレー鉄道物語に欠くことのできない中央駅などが作り上げる英領マラヤ時代の風景要素でさえも、80年代半ば頃までは存在感をもってKLの前景の一部を成していたものである。

しかし、やがてこうした旧植民地都市的風景は後景へと退く。1980年代後半からKLは世界資本「蓄積の劇場」(Armstrong and McGee: 1985) と化し、マレーシア経済の急成長を背景に、90年代に入るとメガプロジェクトが同時展開する舞台となったからである。96年にはブキット・ナナス（パイナップルの丘）の上に400メートルを超すKLタワーが建設され、そして98年には競馬場跡地にオフィスビルとしては世界第1位の高さ約450メートルを誇る2本のトウモロコシ状のペトロナス・ツイン・タワーが屹立するに至り、KLの新たな陸標となった（写真1）。これらのムナラがさしずめ「黄金の三角形」という山体の主峰を成し、それらを取り巻く高層オフィス、ホテル、ショッピングセンター、高級コンドミニアムという峰々が稜線を描くという「地勢」が、今のKLの地理的空間イメージとなっている。90年代のマレーシア経済の好景気を背景とするムナラ建設熱は、97年のアジア通貨危機によって冷水を浴びせられ、外資の引き揚げが大いに懸念されたが、その後、何事もなかったかのように建設工事が再開され、「黄金の三角形」は「方形化」の一途をたどっている。

さらにKL市街地と郊外ニュータウンや衛星都市群とを結ぶ鉄道網の整備、拡充プロジェクトも推進され、Star および Putra の2社による高架鉄道(LRT)もそれぞれ1990年代末に全通した。加えて2002年にはKL市街地内の深刻な交通渋滞を緩和するための環状高架モノレール(PRT)や、マレーシア鉄道(KTM), Star/Putra-LRT, PRTそしてKL南郊50キロに位置する新国際空港(KLIA)を結ぶ高速鉄道(KLIA Express)の統合ハブ駅KLセントラルも開業した。

このようなさまざまなメガプロジェクトの沸騰はKLの空間構成を大きく変えるとともに

に、必然的に郊外のみならず市街地に張り付いていた「第三世界都市」の空間的表象とも言うべきスコッター集落の撤去を伴うものであった。実際、KLタワーの展望台やペトロナスの2本のタワーをつなぐスカイブリッジから見下ろせば、私が80年代に足を運んだ鉄道沿線のインド系集落も含めて、これまで地図に示されていた数多くのスコッター集落が姿を消していることに驚かされる。

III. 「スコッター都市」クアラルンプル

KLは、これまで「スコッター都市」と揶揄されるほどに、スコッター集落が市街地内外で^{そうせい}簇生する都市であった(写真2)。KLにおけるスコッター集落の歴史は古く、英領マラヤ時代にまでさかのぼることができる。錫鉱山で働く華人「苦力」たちが^{いしゅう}蝟集する飯場集落やマレー鉄道の建設や操業にたずさわったタミル系インド人たちによる作業集落、さらにはスマトラからの農業移民集落などの発生に端を発するが、いずれも密林を切り開く開拓者集落としての性格を有しており、しかもマレー人社会の土地慣習法はゆるやかなものであったため事実上、スコットティングは黙認された。

スコッター集落が急増するのは1960年代以降のことである。首都建設や経済成長に必要な地方からの労働力、とくに先住民集団(ブミプトラ Bumiputra)としてのマレー人の流入(マレー人の都市化)はマレー人優先政策の上でも大いに歓迎され、しかも急増する低所得層に対する住宅供給が立ち遅れたため、スコットティングを規制する法律は整備されたものの拡大の一途をたどった。その結果、78年のスコッター人口はKL全体の4分の1に当たる24万人にまでに膨れ上がった。

この年をピークに1980年代に入って一時期減少の兆しを見せたが、92年のスコッター一斉調査により全人口120万の約2割に当たる23万人ものスコッターの存在が確認された。しかもスコッター集落数は82年の204から255にまで増加し、住居数でも3万5000戸から3万8000戸にまで増加していることが明らかにされた。これにより、80年代当初に期待された「西暦2000年までにKLからスコッターを一掃する」との将来見通しは修正され、その目標年を2005年に先延ばしせざるをえなくなった。

その一方、これまで事実上黙認されていたスコッター集落は、次第に、政府やKL市庁にとって、都市空間の有効利用を妨げる除去されるべき「過剰存在」であり、美観を損ねる見苦しい「第三世界的夾雑物」と見なされるようになった。そして1998年1月1日以降、新たなスコッター集落は通告なしに強制撤去する旨の警告が発せられるとともに、開発予定地を不法占拠している集落の撤去、住民の再定住(追い立て)計画が90年代半ば以降、よりいっそう強化されることになったのである。

その結果、1998年のセンサスによれば、スコッター人口は13万人(KL人口の7%)へと減少し、戸数も2万5300戸、カンボン数も197集落にまで急減した。このことは、92年から98年にかけてスコッター家族向け低価格高層フラットの建設・供給の民営化プロジェクトが大きく前進したことを物語っている。その後、スコッター・センサスは実施

写真1 マレー系スコッター集落
(手前) とペトロナス・ツ
イン・タワー (背後)
(1999年3月藤巻撮影)



写真2 クアラルンプル郊外, 鉄道沿線のスコッター集落 (2002年9月藤巻撮影)

されていないが、新聞記事を渉猟するかぎり、KLといい隣接のスランゴール州といい、各地で着々とスコッター集落の撤去と住民の追い立てが進行していることがうかがわれる。

先に、1990年代はKLにとってメガプロジェクト沸騰の時代であったと述べたが、それはKLが「第三世界的スコッター都市」から脱却し、「熱帯の美しい庭園都市」あるいは「世界都市」に向かうための助走の時代であったと言い換えることもできるかもしれない。

IV. 「熱帯の美しい庭園都市」クアラルンプル

「熱帯の美しい庭園都市」創造の動きは、実際にはすでに1980年代後半から、政府主導の「美化政策」のかたちをとって表れていた。たとえば、89年の東南アジアスポーツ大会や英連邦首脳会議、90年のマレーシア観光年をひかえて、マハティール首相は次のようにKL市民に対して訴えたことがある。

KLを世界で最も美しい都市だと知られるように、ゴトンロヨン（藤巻注：gotong-royong マレー人社会における伝統的相互扶助慣行）精神で実現に向けて努力する必要がある。（NST：November 21, 1988）

またKL市長も自ら街頭視察を行い、美化運動に率先唱導の姿勢を示し、「見苦しいもの」の除去に市民も協力すべき旨、呼びかけている。

10月には東南アジアスポーツ大会および英連邦首脳会議が開催される。さらに12月からはマレーシア観光年の事業が始まる。……KL市長は「見苦しいもの」を一掃し、美化につとめる市内美化プログラム推進のためトイレ、裏通りなどを視察した。……同市長は、国家元首宮邸（Istana Negara）という崇高なる場所の向かいの遊休地にスコッター集落が存在していることを嘆く（MM：16 June, 1989）

こうした官製美化運動は1990年代においてよりいっそう強化される。マレーシア経済の成長に伴い、国際会議や大がかりなスポーツ・イベントがKLで開催される頻度が増すようになったからである。たとえば、第16回英連邦スポーツ大会（Commonwealth Game）とAPECが開催された98年には、新聞やTVなどのマスメディアを通じて、外国からの賓客や観光客の受け入れを意識した美化キャンペーン“Beautification and Landscaping KL”が連日のように繰り広げられた。河川や排水溝などへのゴミ不法投棄の戒めにはじまって、露天商や屋台商取り締まりの強化、ゴールドデン・トライアングルやチャイナタウンなど繁華街の表通りに面する老朽建造物の補修整備、壁の塗り替えを所有者へ通告することなど、政府・市庁は「美しいメトロポリス」の創造を市民に呼びかけて

いる (MM : August 19, 1998)。

このような都市美化, 言い換えればKLの「エステ化」(園部 2001) 政策は, ホテルやレストラン, ショッピングセンターが軒を並べるブキット・ビンタン (星が丘) 通りやスルタン・イスマイル通り界隈の「KL版シャンゼリゼ化」プロジェクトとなって表れている。たとえば, 遊歩者と視線を交わしながら街のざわめきやライブ演奏が楽しめるカフェテラスやドリンクバーがあちこちに配置され, 日が暮れると電飾塔と化すツイン・タワーやKLタワーの下をめぐる表通りの一带はイルミネーション・モールへと改造された。こうした空間の創造は, 外国人観光客に熱帯都市の夜を満喫してもらおうという構想にもとづいている。仕掛け人は政府そしてKL市庁である。

KLのもう一つの顔でありKLにとって重要な観光資源であるチャイナタウンも, 外国からの観光客にとってあくまでも喧騒猥雑なチャイナタウンであらねばならないのだが, 老朽化した建物は修復され, かつてはゴミが散乱し悪臭漂っていた屋台街は衛生管理が行き届いた空間へと変貌をとげている。

こうしたKL美化政策は, 外国から賓客や観光客を招き入れ, 外貨獲得のための戦略であるだけでなく, KLを「一等国」の首都あるいは「世界都市」の仲間入りさせたいとの政府指導者の熱望を反映したものにほかならない。たとえば, KLで開催されたある国際会議で, マハティール首相の後継者と目されるアブドゥラー副首相は, 「世界都市」という用語を再三混じえながら次のような演説を行っている。

「世界都市」(global city) になるためには, KLは解消しなければならない問題を抱えている。環境汚染, 交通渋滞, サービスやメンテナンスを尊ぶ文化の欠如, これらは第三世界都市的側面を表している。……都市開発を進める一方で, 歴史的遺産の保全, 社会的病理, 都市の貧困, スクォッター問題, 雇用問題について取り組んでいかねばならない。……クアラルンプルをマレーシア人だけでなく地球市民にとってもくつろげる場 (ホーム) にするためには民間セクターや市民の協力が必要だ。食事から劇場, 国際的な銀行拠点, 近代的インフラに対する適正なサービスやメンテナンスに至るまで, 世界クラスの世界都市 (world's global city) の名にふさわしい地球市民に提供できるあらゆるものが備わっていなければならない。(NSUNT : February 25, 2001)

また, 同じ会議でKL市長も, 2020年までにマレーシアを先進工業国の仲間入りをめざす「Wawasan 2020」(ビジョン2020: 1990年代初頭にマハティール首相が打ち出した国家的長期構想) と関わって, 同年までにKLをあらゆる面で「世界都市」の水準に高めるべく「安全な都市」「都市の緑化」「衛生的な都市」「川を愛そう」キャンペーンを展開していくことを公表している。

V. 急増するアラブ人ツーリストと外国人労働者

—世界都市化するクアラルンプルの光と影

近年、東南アジア諸国の都市化状況を国民経済をベースとした「過剰都市化」論からではなく、フリードマン (Friedmann, J.) の「世界都市仮説」やサッセン (Sassen, S.) の「世界都市論」との関わりの中でとらえなおすべきであるとの論調が定着するようになった。すなわち、メガ都市化を経験しつつある東南アジアのプライメイトシティを、ロンドンやニューヨーク、ロサンゼルス、東京という「世界中核都市」(global center city) を頂点とする世界大の都市システムに、これまで以上に強く結びつけられた「周辺の世界都市」として解釈するようになってきている。KLを真の「世界都市」へとランク・アップさせよう、シンガポールを超えた東南アジアの拠点都市をめざそうという政治的指導者たちの主張は、こうした文脈の中で理解されねばならない。

とはいえ、いつどの段階で、KLが真の「世界都市」として位置づけられるのかどうかについては、この小稿の関心事項ではない。ただ言えることは、KLという舞台に登場してくる人々の顔ぶれから見て、「世界都市」化するKLというイメージは鮮明度を増しつつある。たとえば、アラブ人ツーリストとインドネシア人など外国人労働者や外国系スクォーターの急増というKLのエスノスケープ (ethnoscape) の変貌にその予兆を見とることができるということである。

1. アラブ人ツーリストの急増

観光戦略や都市美化政策が功を奏してか、ツーリズム部門が今や外貨獲得高では工業部門に次いで第2位を占めるようになった。日本からみると、シンガポールやタイ、インドネシアに比べてマレーシアはさほど関心を呼ばないが、この国そしてKLを訪れる外国人観光客は年々増加している。詳しい数字は手元にないのであくまでも私の印象にもとづくものだが、アジアに限って見た場合、ブキット・ビンタン通りで目立ったツーリストは、これまで日本人や韓国人であったが、1990年代末頃からは広東省など大陸中国からの団体客が目引くようになった。しかし、2002年の夏のブキット・ビンタン通りや郊外のアミューズメントパークなどでひととき目を引いたのは黒ずくめの衣装に身を包み込んだ女性たちを含むアラブ人ツーリストの団である。

現地の英字新聞は次のような見出し付きで、アラブ人ツーリストのブームとその背景について報じている。

「アラブ人が大金をそそいでくれるおかげで観光産業が急成長」(*Sun*: August 24, 2002)

「マレーシアに観光天国を発見」(*NST*: September 10, 2002)

「アミューズメントパークはアラブ人家族連れで大賑わい」(*NST*: September 10,

2002)

これらの新聞記事を要約、再構成すれば、次のようになろうか。

マレーシアの観光業界は、アラブ首長国、カタル、サウジアラビア、クウェート、オマーンなどからの旅行者が続々と押し寄せてきて活気づいている。……「9・11」以来、テロの恐怖におののきアラブ人をうさんくさく思う西洋諸国よりも魅惑的なイスラームの国、マレーシアを休息の場所として選ぶアラブ人の数が増えている。全身を黒い服で覆って目だけを出しているアラブ女性たちを見れば、マレーシアへのアラブ人観光客の急増は明らかだ。

2000年には中東からの観光客はわずか5万7000人だったのが、2001年には11万5000人にまで増大した。今年（2002年）は20万人以上にまで膨れ上がるものと予想されている。とくに6月から9月の時期にアラブ諸国からの観光客が集中する。その理由は、気温が40度を超えるその季節は中東諸国では子供たちの夏休みにあたり、避暑をかねてマレーシアにやってくるものとみている。そうした彼らにとって、マレーシアにはペナン、ランカウィなどの海岸リゾートがある一方で、キャメルンハイランドやゲンティンハイランドという冷涼な高原や近代的な「熱帯の美しい庭園都市」KLなど場所の変化に富むこの緑濃き国は楽園と映るのだろう。しかも年に3回、1カ月間ずつ繰り広げられるようになったメガセール（バーゲンセール）の第2期目は8月に開催される。本国では満喫できないショッピングがこの時期、堪能できるのだ。



写真3 クアラルンプル郊外のアミューズメントパークで遊ぶアラブ人観光客（2002年8月藤巻撮影）

さらにマレーシアは穏健なイスラーム教国であり、ムスリムにとって食事が安心してできるハラール保証付きのケンタッキーやマクドナルドのファストフードも楽しめる。到るところにモスクもある。このように、マレーシアは彼らにとって自国と同じような居心地の良さを享受できる一方で、しかしマレーシアがまったくの異国であることを1999年以来、積極的に売り込んできた成果だと政府関係者は語る。

2001年の9月11日以降、アラブ人の入国手続きが困難になったことや入国が歓迎されていないという感情から、中東の観光客は欧米へ行くことを避けていると言われていた。しかしマレーシア観光がアラブの人々を引き付けたのはそうした理由からではなく、むしろマレーシアという国の持つ魅力によるものだということが、アラブ人たちの声から明らかになろうとしている。たとえば彼らにとってKLは近代的なショッピングセンターが数多い上に物価が安く、街は安全で、夜遅くまで交通サービスが行き届いている。子供のみならず大人も楽しめるアミューズメントパークなどの娯楽施設も充実している(写真3)。そしてなによりもマレーシア人のほとんどが英語を話せる。金持ちの客たちにねらいをつけて、KLの主なホテルではアラビア語を話す従業員を雇い入れたり、中東料理を加えるようになった。アラブ人観光客の急増で、中東料理のレストランも繁盛している。ちなみに平均で約10日間のマレーシア滞在中、一人当たり消費額は平均3300リンギット(日本円で約10万円。KLでの核家族がかりうじて暮らしていける月収3カ月分)であったという。

このように、メッカ巡礼の団を送り出していたマレーシアが、今やアラブ人観光客を迎え入れるホスト国になった。これも「世界都市」化途上のKLを物語る証左の一つと言えるだろう。なぜならば、単にKLが世界的な集客都市となりつつあるという点からだけではなく、経済的にも政治的にもイスラーム圏(という世界単位)における重要な結節点としての力量を持ち始めていることの兆しとして読み取れることもできるからだ。さらにはマレーシア(の首都KL)が、これまで連繫を強めてきた東アジア世界とアラブ世界とが出会い、新たな世界形成のための触媒としての役割を果たすことが期待されるからでもある。となれば、近い将来、KLがシンガポールと同レベルの「世界都市」に位置づけられることは想像に難くない。

2. 外国人労働者をめぐるマレーシア・ジレンマ

他方、アラブ人観光客が国をあげて大歓迎されるなか、同じく外国人であってもインドネシア人など外国人労働者に対する処遇は大きく異なる。2002年、マレーシア政府は、同国内に不法滞留している推定で40万人もの外国人労働者に対して、同年7月31日までに出頭してきた者に対してはその罪を不問にし8月1日以降、本国へ強制送還をする一方で、同日以降もなお不法滞在している者については逮捕、拘留、鞭打ち、収監という厳罰に処すことを決定したのである。こうした外国人労働者に対する措置は、国内的には深刻な労働力不足問題、対外的にはフィリピンやインドネシアとの外交問題へと発展したことは記

憶に新しい (FEER: August 29, 2002)。

外国人労働者の流入が社会問題化するようになったのは、マレーシア経済が高度成長期に入り外国からの安価な労働力を大量に受け入れざるをえなかった1980年代後半からである。97年当時の就労ビザ取得者は約72万人であったが (Azm Zehadul Karim *et al.*: 1999), 新聞報道によれば、不法滞在者を含めた外国人労働者の数は100万人は下らないものと見られていた。最も多いのが6割を占めるインドネシア人であり、このほかにフィリピン、バングラデシュ、パキスタン、タイ、ミャンマーなどからの流入者が加わる。ちなみに97年のKLにおける合法的な外国人労働者数は35万3000人であり、隣接州のスランゴール州の4万2000人を合計すると、KL大都市圏だけで全体の約6割を占めていたことになる。

マレーシアにおける外国人労働者問題を包括的にとらえるとともに、外国人移民に対する地元民の社会・文化・心理的葛藤について分析、考察したアズム＝ズハドゥル＝カリムほかによれば、マレーシア経済社会が外国人労働者により支えられているという現実があるにもかかわらず、外国人労働者の急増に伴い、これまで以上にスコッター問題が深刻化し、麻薬、マリファナ、窃盗、暴力事件などの犯罪が急増し、エイズや伝染病の蔓延がマレーシア社会を脅かしているといったマイナス・イメージが地元社会で強まっていることを明らかにしている。このことは、次の地元有力英字紙における論評にもよく表れている。

1993年末現在、マレーシア全体の労働力の13%に当たる105万3400人も外国人労働者が国内に在留しているが、これによりわが国の保健、社会、経済、安全面における負担が大きくなってきている。93年のマラリア感染者の15%、結核患者の11%、エイズ感染者の4%、ハンセン病患者の3%が外国人労働者の罹患によるものと推測されている。また全国で外国系スコッターが増加してきており、スランゴール州だけでも5400戸以上の外国系スコッター住居を数えることができる。教育面に目を転ずれば、外国人労働者の子弟5万人以上が学校に通っている。……移民の増加は犯罪の増加にもつながっている。KLでは事態がますます深刻化しており、地元住民は市内の移民集住地区を避けるようになってきた。……しかし100万以上の外国人労働者をこの国から一掃することは容易ではない。……外国人労働者なしにはプランテーションはやっていけないし、工場の生産ラインは行き詰まり、建設プロジェクトはお手上げになる。……共稼ぎ家庭の子供の面倒は誰がみるのだろうか。(BT: February 23, 1995)

またマハティール首相は、マレーシア経済は過剰なまでに外国人労働者に依存していることの危険性について、次のように言及している。

マレーシアには推定で170万もいるという。このことはマレーシアの人口・経済規模

両面から見てあまりにも外国人労働者に依存していることを示している。……外国人労働者の多くはインドネシア人であり、サバの刑務所には現地人を上回るフィリピン人が収容されている。マレーシア国内で根絶させた病気やウイルスを外国人労働者が持ち込んできている。さらに彼らはスコッター・コロニーをよりいっそう過密なものにし、我々の文化に対抗する社会的文化的要素を持ち込んでいる。(NSUNT: August 24, 1997)

ところで、以上の記事でも指摘されている外国系スコッターをめぐる問題は1980年代末頃から、すでに大きな社会問題として新聞でも報じられていた。たとえば89年、KLには非合法滞在者を含めて、インドネシア系スコッター集落だけでも56、住居数では2172戸、4518家族、1万2401人の居住が見られたという(Azm Zehadul Karim *et al.* 1999)。しかし、KLにおいて外国系スコッターをも含めた本格的な調査が実施されたのは92年センサスにおいてであり、就労ビザや永住許可証を保持していた者は、その当方で約8300人を数えた。98年次調査では1万人へと増加し、スコッター全人口に占める割合も5%から8%へと上昇していること、また約9割を占めるインドネシア人のほかに、バングラデシュ人、タイ人、パキスタン人、ミャンマー人が含まれていることが明らかにされた。先に述べたように、92~98年の間に、KLのスコッター全体人口は23万人から13万人に減少したことからすれば、この間の外国系スコッターの増加は目を引くものがある。

スコッター・センサスで捕捉された1万人という外国系住民の数は、実態を反映するものではない。それらは永住許可証や就労ビザを保有する合法的滞在者であり、不法滞在者は一斉調査時にはゆくえをくらしめていたものと考えられるからである。

本来、合法的にマレーシアに入国した労働者の場合、雇用主からアパート(数人での共同生活)や建設現場における仮設住宅などの住居が与えられることが義務づけられているが、現実にはそうした住居の斡旋のない場合が多い。安価な労働力として受け入れられた外国人労働者にとって、民間住宅への入居は高家賃のため事実上、不可能に近い。また低所得層向け低価格住宅への入居は外国人に対して制度的に認められておらず、その結果、移民労働者の多く、とりわけ不法入国者はスコッチングを余儀なくされてきた。当初、合法的に入国した労働者すら雇用期限後、不法滞在者としてスコッター化するケースも多く、生存戦略上、「移民集落」すら形成されるに至っている。

錫採掘地跡や二次的密林などの広大な未開発地域が残されている一方で、1990年代にLRT、新たな自動車道、郊外の巨大リゾートホテル、アミューズメントパーク、ニュータウンの建設などさまざまな開発プロジェクトが集中したKL大都市圏には70以上の外国系スコッター・コロニーが確認され、推定で10万以上の外国人労働者(不法移民を含む)がスラムや密林に住んでいるものと見込まれていたのである(MM: July 18, 1994)。ちなみに、KL大都市圏の郊外地域にあたるスランゴール州の外国系スコッター問題は深刻化し、97年末には全体で3万3000戸、17万人規模のスコッチングが確認され、そのう

ちインドネシア系など外国系スコッターの戸数割合は17%を占めたとされている(NST; BT: January 5, 1998)。また、街中において屋台や食堂の従業員などサービス業に従事している者は賃貸アパートでの共同生活を余儀なくされてきたが、その一方で在来スコッター集落で借家住まいをするスコッターも急増した。

マレーシア人によるスコッター集落が減退していく中で、地元住民にとっては、外国系スコッター集落はこれまで以上に「過剰存在」と映る。それは、外国系コロニーに対する呼称となって表れる。インドネシアやバングラデシュ、ミャンマーなどさまざまな国からの移住者が多かったある集落は「ミニ国連」(MM: March 15, 1996)、Putra-LRTの建設現場に残された飯場に居残った外国人労働者の蟻集地は「リトル・インドネシア」とも「リトル・バングラデシュ」とも呼ばれたものである(MM: July 29; 30, 1998)。そして通称「ミニ・ジャカルタ」と呼ばれたある集落は、「麻薬天国」という異名をもってKL大都市地域住民の「頭の中の恐怖地図」にしっかりと刻み込まれた(MM: February 9, 1994)。

このように新聞記事に描かれた外国人労働者・外国系スコッター像は、地元住民による彼らに対する脅威の眼差しを反映したものであると言えるかもしれないが、他方で新聞報道がKL市民の外国人労働者に対するネガティブ・イメージ形成の増幅媒体としての役割を果たしてきたことに留意すべきであろう。

2002年8～9月に再訪したKLにおけるスコッター社会の風景は一変していた。KLでも、「スコッター州」と呼ばれてきたスランゴール州においても、数多くのスコッター集落が姿を消していたのである。前回訪れた2000年3月、それ以降の新聞記事の検索作業を通じて、2002年に入ってからスコッター集落の撤去が急速に進められたことが明らかとなった。「2005年までにはスコッターをゼロにする」という目標を掲げてきたKLやスランゴール州当局のなんとしても目標年までにスコッターを払拭しようという意気込みの表れと言えよう。かつてなら、住民の手強い抵抗がスコッター住居の撤去を立ち遅らせてきたものだが、そうした記事はほとんど見られない。うむを言わさぬ強制執行が行われたようである。

それを可能にしたのは、スコッター住民の再定住を促す低価格高層フラットの建設が順調に進んだからである。その一方で、不法在留外国人の居住地としての役割を果たしてきたスコッター集落を撤去することにより、彼らの不法滞在を物理的に難しくさせるというねらいもあったことに留意すべきであろう。たとえば、アブドゥラー副首相は連邦下院議会で、政府はスコッター集落の膨張を抑制すべく不法移民の摘発に取り組んできたが、2000年には12万778人だった不法移民の逮捕者数は2001年には15万8428人にのぼり、2002年の最初の2カ月だけでインドネシア人1万5037人、ミャンマー人1532人、バングラデシュ人384人を含む1万7949人が逮捕されたことを報告している(BT: March 13, 2002)。また、スランゴール州政府は州議会で、2002年4月中に同州の外国系スコッター集落の88%が確実に撤去されることになっていることを明らかにし(MM: March 29, 2002)、さ

らには外国人不法滞在者の多くが商売をしている違法屋台の摘発を進めることを宣言していたのである (NST: May 22, 2002)。KL西郊に位置し、かつては人口1万人の規模を有し、マレーシア最大のインドネシア系移民集落として知られていたカンボン・スンガイ・カユ・アラもその一例であり、すでにカユ・アラ川沿いの掘立て小屋群は完全に一掃されている。

とはいえ、KTMやLRT沿線にはまだ数多くのスクォッター家族が暮らすカンボン (kampung: 「村」を意味するマレーシア語) が見え隠れしている。2001年3月にマレー系住民とインド系住民との口論に端を発し、集落内外の両エスニック・グループが衝突、多数の死傷者を出したKL南西郊外のカンボン・メダン (NST: March 18, 2001) もタマン・メダン (taman とはマレーシア語で「公園」の意味) という名前に改称されながらも、周囲での住宅開発が進む中、健在である。3年前に麻薬中毒者による失火が原因で類焼、焼け出され、今は市営の木造棟割長屋に仮住まいをしているマレー人の友人の車で、カンボン・プミプトラなどいくつかのマレー系カンボンをめぐるみると、住人の大半がインドネシア系住民 (そのほとんどが合法的入国者) に取って代わられている。前住者のマレー系住民が低価格住宅に移り住んだ後、インドネシア人が空家を購入もしくは借家人となっているのである。再開発のために撤去されるまでの短い期間であろうとも、低価格住宅への入居が制限されている外国人労働者の生存戦略にほかならない。

VI. 「二重都市」化するクアラルンプル

過去20年間に及ぶマレーシア経済の急成長は、まさに「繁栄の中の貧困」(Jamilah Ariffin ed. 1994) をより鮮明なものにし、言わば「住宅階級」とも呼べる階層的亀裂を生み出した。すなわち一方で、専用プール付き高級アパートやコンドミニウムを住まいとし、ジャワ人のメイドを雇い、ボルボやホンダで都心の高層オフィスに通勤する新中間層 (Kahn 1993) と、他方で開発や美化のために追い立てられるスクォッターおよび老朽化した木造棟割長屋か低価格フラットの暮らしに甘んじざるをえない都市下層民という分裂である。こうした「住まい方」の可視的差異の拡大は、所得の格差以上に両者の社会心理的距離や「可視的不平等」(園部 2001) 感をも広げたと見えよう。

さらに加えて言うならば、マレーシア国籍のスクォッターの再定住政策が推進され、オランアスリ (半島マレーシアの少数原住民族)、生活保護を受けている母子家庭や老人、身障者などマレーシア人の絶対的貧困層 (the hard-core poor) に対する生活の質の改善政策が次第に手厚くなりつつあるなかで、外国人労働者、とりわけスクォッター・ライフを余儀なくされている人々や摘発をまぬがれた不法滞在者たちは、労働力不足を補う存在として経済システムの中に組み込まれながらも、不当な雇用条件、居住条件での暮らしを余儀なくされ、しばしば地元民からは蔑視の対象となっている。そういった意味において、彼らこそ現代マレーシア社会そして熱帯のメトロポリス、クアラルンプルにおける新たなロウワーワーキング・クラスあるいはアンダー・クラスを成しているものと見なすことがで

きよう。こうして、KLが「世界都市」化の様相を帯び始めているとの私見は、この街が「二重都市」「分裂都市」的特性をますます強めつつあるからにはほかならない。

この小稿は、「世界都市」論や「世界都市化」論あるいは経済的再編成（リストラクチャリング）は社会的再編成を引き起こすという「社会的分極化」あるいは「二重都市」論など、1980年代以降興隆をみた都市論的枠組みを意識しながら、KLの現在を粗描したものである。従来、これらの都市論は、いわゆる欧米の大都市研究、最近では東京を対象にしたものがほとんどであったが、ここでは一つの試みとして発展途上国都市のクアラルンプルの都市像を描くために援用してみた。厳密な議論や記述は別稿に期したい。

参考文献

園部雅久

2001 『現代大都市社会論——分極化する都市?』東信堂。

藤巻正己

1993 「都市の村人」考——東南アジア都市研究から眺むれば（森栗茂一編『都市人の発見』木耳社）21-71。

1998 「クアラルンプルの生きられたスコッター・カンポン——1980年代マレーシア都市下層社会の風景」（江口信清編『「貧困の文化」再考』、有斐閣）113-176。

2000 a 「1990年代クアラルンプルのスコッター問題と再定住政策」（大阪市立大学経済研究所監修、生田真人・松澤俊雄 編『アジアの大都市 [3] クアラルンプル・シンガポール』日本評論社）91-120。

2000 b 「クアラルンプル大都市地域における外国系スコッター」（『立命館地理学』12）19-42。

2001 「クアラルンプルの都市美化政策とスコッター——新聞に描かれたスコッター・イメージ」（藤巻正己 編『生活世界としての「スラム」——外部者の言説・住民の肉声』古今書院）60-93。

Armstrong, W. and McGee, T. G.

1985 *Theatres of Accumulation: Studies in Asian and Latin American Urbanization*, Methuen.

Azm Zehadul Karim et al.

1999 *Foreign Workers in Malaysia: Issues and Implications*, Utusan Publications and Distributions.

Dewan Bandaraya Kuala Lumpur

1999 *Laporan Kajian Pengawasan dan Penempatan Semula Setinggalan: Wilayah Persekutuan Kuala Lumpur*.

Jamilah Ariffin (ed.)

1994 *Poverty amidst Plenty: Research Findings and the Gender in Malaysia*, Pelanduk Publications.

Kahn, J. S.

1993 “Growth, Economic Transformation, Culture and the Middle Classes in Malaysia”, in Robinson, R. & Goodman, D. S. G. (ed.), *The New Rich in Asia: Mobile Phones, McDonald's and Middle-class Revolution*, Routledge, 49-75.

<文中で略称した雑誌・新聞名>

BT: *Business Times*, MM: *Malay Mail*, NST: *New Strait Times*, NSUNT: *New Sunday Times*, Sun: *The Sun*, FEER: *Far Eastern Economic Review*